

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第106回研究会 発表会)

その他のタイトル	Resumee der Referate bei der Tagung 2012
著者	木戸 幸, 米村 恵吾, 田中 みどり, 崎山 円
雑誌名	独逸文学
巻	58
ページ	143-146
発行年	2014-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017981

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第106回研究発表会)

1. オノマトペの日独比較

— 宮沢賢治の作品を中心に —

木戸 幸

諸外国語と比べ、日本語におけるオノマトペの数は圧倒的に多い。そして日本語のオノマトペは文法面のみならず、日本人の生活にも深く根付いている。オノマトペは日本語特有の言語現象ではないが、日本語の大きな特色であると言える。しかし、日本語にオノマトペが多いことが、時に外国語への翻訳を困難なものにする。日本語から英語へのオノマトペの翻訳を考えると、「日本語のオノマトペはそれに相当する特定の英語で言語形式的には勿論、内容的にも表現しにくい場合が多い。これは翻訳の不十分さによるものではなく、その統語的及び意味論的等価の限界と言っている」（青木昭六「日英語表現比較：宮沢賢治の作品に見られるオノマトペの英訳文に基づいて」、『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』18（2003）6ページ）という意見があるが、将来的にこれを克服する方法はないのであろうか。

この問題を考えるにあたって、本研究では日本語よりオノマトペを用いる頻度の少ないドイツ語への翻訳技法を分析しながら、両言語の特質を考察した。まずオノマトペが多用されるマンガの翻訳技法にどのようなものがあるかを分析し、分類を試みた。マンガはイラストがあるので、オノマトペの理解を容易にするが、小説では文字のみから正確な訳が要求される。そこで次の段階として、独創的なオノマトペを用いることで有名な宮沢賢治の短編集を用い、ドイツ語への翻訳技法を分析した。小説におけるオノマトペの翻訳技法としてとても興味深いのは、イラストの助けを借りることのできない小説にもマンガと同じ翻訳技法が多く見られたことである。特に日本語のオノマトペを外来語としてそのまま使用する例は注目に値する。これは多くの翻訳者を悩ませ、未だ誤訳の

多いオノマトペを、日本語母語話者ではない人々に今より正確に理解してもらうための手がかりになるのではないだろうか。

2. ドイツにおける Migrantenliteratur の歴史

— ドイツトルコ系の作家を中心に —

米村 恵吾

人類の歴史は移動の歴史であり、現在を見てもグローバリゼーションという語に代表されるように、日々世界中で人の移動が行われている。そのような人の移動の産物の一つである、いわゆる「移民文学」は、欧米を中心に様々な形で研究され、盛んに議論が交わされてきた。

本発表では、まずドイツにおける移民政策の流れを大まかに説明した後に、ドイツにおける Migrantenliteratur — 日本語にするならば「移民文学」 — の歴史と研究の流れを、ドイツトルコ系の作家を中心として発表した。上記のように「移民文学」は広く研究されてきた文学であるが、特にドイツ国内の研究においてはその研究も一定の分野に偏って議論されてきたように思われるため、その点についても言及した。

また、現在のドイツにおける Migrantenliteratur に対する研究の中でしばしば議論されるのが、その言葉の定義である。どのような著者が執筆したものが Migrantenliteratur として認められるのか、第一世代の移民による著作しか認めないのか、あるいは法的に「移民の背景を持つ者」として分類される著者であれば誰でもよいのか等、いくつもの議論が交わされている。

本発表でもその研究史と共に、Gastarbeiterliteratur, Betroffenheitsliteratur, Minderheitenliteratur, Migrantenliteratur, Migrationsliteratur, Interkulturelleliteratur といった、これまで移民文学が研究されてきた中で提唱され、議論されてきた概念を紹介するとともに、それらの是非について考察を行った。

3. 中高ドイツ語韻律詩の押韻技法について

— *Der arme Heinrich* について —

田中みどり

ドイツの中世文学とは8世紀頃から15世紀頃までの文学を指し、それは3つの時期に区分される。キリスト教布教を目的とした宗教文学である初期中世文学、騎士を中心に繁栄した宮廷叙事詩とミンネザング、そして都市の市民を担い手とする後期中世文学である。この中でも、特に中世文学の最盛期となるのは、中期中世文学の宮廷叙事詩とミンネザングであった。ハルトマン・フォン・アウエはこの中期中世文学の時代に活躍した人物である。彼に関する客観的な資料はほとんど残っておらず、生涯については、作品の中に見られる詩人についての言及から推測されるのみであるが、それによると、おおよそ1160～1210年に生きた騎士であり、またかなりの学識を有した詩人でもあったことがわかる。

中世盛期の文学作品では「何を語るか」ではなく「いかに語るか」に重きが置かれた。なぜならば、外国からの既成の物語をそのままに、舞台をドイツに変えた作品が主流であったからである。そのため詩人たちの一語一語の選択やレトリック、押韻の工夫に作品の価値が見いだされた。その中でも、ハルトマンは作詞の形式における自由を排した、可能な限り均整のとれたなだらかな詩行に定評がある。それは具体的にどのような詩行であるのだろうか。

今回の発表では、小品ではあるが、彼の重要な作である『哀れなハインリヒ』（*Der arme Heinrich*）を取り上げた。これは全1520行からなる短編作品で、当時のほとんどの叙事作品と同様、四抑格の行が二行ずつ脚韻を踏む対韻の詩行からなる。全詩行に韻律を付与し、詩行のはじめにくるアクセントのないアウフタクト、詩行全体のリズム、詩行の末尾を締めくくる押韻、そして頻出する単語の観点から、詩人の押韻技法の特徴を調べ発表した。

4. 文学部におけるテレビドラマ *Tatort* 研究について

崎山 円

本発表では、文学部でのテレビドラマ研究の可能性を探るべく、ドイツの大学でテレビドラマ研究、とりわけ、Krimi ドラマ *Tatort* の研究がどのように行われてきたかを紹介した。テレビ研究やテレビドラマ研究と言えば日本では往々にして社会学の範疇であるが、ドイツをはじめとするヨーロッパや北米では文学部において、カルチュラルスタディーズなどでさかに行われている。発表の前半は、ドイツでの民間の研究機関でのテレビ研究、大学でのテレビもしくはテレビドラマ研究プロジェクトを紹介し、後半はドイツで約40年放送されている Krimi ドラマ *Tatort* を対象にした論文・著書3本をとりあげた。民間の研究機関——ここではドイツ第二放送の *Mainzer Tage der Fernsehkritik* とグリメ研究所をとりあげた——ではテレビと政治、経済との関連に重きを置く傾向がある一方、大学でのプロジェクト——ジーゲン大学、ケムニッツ大学、ハレ大学、レーゲンスブルク大学、ゲッティンゲン大学の各プロジェクト——は文学、言語学、メディア学、歴史学、社会学などあらゆる専門の集合体で成り立っており、さらには他大学との交流も見られる。

Krimi ドラマ *Tatort* は放送年月が長いということ、アクチュアルなテーマ、他の Krimi ドラマとは違い舞台と捜査官が毎週変わるが、何か月後かには再び同じ舞台と捜査官が登場するといった *Reihe* と *Serie* が入り混じっている特殊性などから研究対象として好まれている。今回具体例として Julika Griem と Sebastian Scholz の論文 *Zur medialen Topographie des Tatort*、Christina Ortner の *Migranten im Tatort Das Thema Einwanderung in beliebtesten deutschen TV-Krimi*、Nicole Karczmarzyk の *Der Fall Tatort Entschlüsselung eines Kulturkrimis* の3本の著書・論文をとりあげ、それぞれ *Tatort* のオープニングとドイツ人の記憶、コミュニケーション学の観点から見る移民、そして物語論を使った分析を紹介し、文学部でのテレビドラマ研究の可能性を示した。